

**[A年]待降節第4主日(2020年12月20日)****【旧約聖書日課】イザヤ書7章10～14節**

<sup>10</sup>主は更にアハズに向かって言われた。<sup>11</sup>「主なるあなたの神に、しるしを求めよ。深く陰府の方に、あるいは高く天の方に。」

<sup>12</sup>しかし、アハズは言った。

「わたしは求めない。  
主を試すようなことはしない。」

<sup>13</sup>イザヤは言った。

「ダビデの家よ聞け。  
あなたたちは人間に

もどかしい思いをさせるだけでは足りず  
わたしの神にも、もどかしい思いをさせるのか。

<sup>14</sup>それゆえ、わたしの主が御自ら

あなたたちにしるしを与えられる。  
見よ、おとめが身ごもって、男の子を産み  
その名をインマヌエルと呼ぶ。

**【使徒書日課】ヨハネの黙示録11章19節～12章6節**

**11**<sup>19</sup>そして、天にある神の神殿が開かれて、その神殿の中にある契約の箱が見え、稲妻、さまざまな音、雷、地震が起こり、大粒の雹が降った。

**12**<sup>1</sup>また、天に大きなしるしが現れた。一人の女が身に太陽をまとい、月を足の下にし、頭には十二の星の冠をかぶっていた。<sup>2</sup>女は身ごもっていたが、子を産む痛みと苦しみのため叫んでいた。<sup>3</sup>また、もう一つのしるしが天に現れた。見よ、火のように赤い大きな竜である。これには七つの頭と十本の角があって、その頭に七つの冠をかぶっていた。<sup>4</sup>竜の尾は、天の星の三分の一を掃き寄せて、地上に投げつけた。そして、竜は子を産もうとしている女の前に立ち、産んだら、その子を食べてしまおうとしていた。<sup>5</sup>女は男の子を産んだ。この子は、鉄の杖ですべての国民を治めることになっていた。子は神のもとへ、その玉座へ引き上げられた。<sup>6</sup>女は荒れ野へ逃げ込んだ。そこには、この女が千二百六十日の間養われるように、神の用意された場所があった。

**「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ****イザヤ書7章10～14節**

<sup>10</sup>主はさらにアハズに語られた。<sup>11</sup>「あなたの神である主にしるしを求めよ。陰府の深みへと、あるいは天へと高く求めよ。」

<sup>12</sup>しかし、アハズは、「私は求めません。主を試すようなことはしません」と言った。

<sup>13</sup>イザヤは言った。

「聞け、ダビデの家よ。あなたがたは人間を煩わすだけでは足りず、私の神をも煩わせるのか。  
<sup>14</sup>それゆえ、主ご自身があなたがたにしるしを与えられる。見よ、おとめ〔直訳→若い女〕が身ごもって男の子を産み、その名をインマヌエル〔「神は我らと共にいる」の意〕と呼ぶ。」

**ヨハネの黙示録11章19節～12章6節**

**11**<sup>19</sup>そして、天にある神の神殿が開かれ、その神殿の中に契約の箱が見えた。すると稲妻、轟音、雷鳴、地震が起こり、大粒の雹が降った。

**12**<sup>1</sup>また、天に大きなしるしが現れた。一人の女が太陽を身にまとい、月を足の下にし、頭には十二の星の冠をかぶっていた。<sup>2</sup>女は身ごもっていて、産みの痛みと苦しみのため叫んでいた。<sup>3</sup>また、もう一つのしるしが天に現れた。それは巨大な赤い竜であって、七つの頭と十本の角を持ち、頭には七つの王冠をかぶっていた。<sup>4</sup>竜の尾は、天の星の三分の一を掃き寄せて、地上に投げつけた。そして、竜は子を産もうとしている女の前に立ち、生まれたら、その子を食い尽くそうとしていた。<sup>5</sup>女は男の子を産んだ。この子は、鉄の杖であらゆる国の民を治めることになっていた。子は神のもとへ、その玉座へと引き上げられた。<sup>6</sup>女は荒れ野へ逃げた。そこには、この女が千二百六十日の間養われるように、神の用意された場所があった。

**新共同訳****【福音書日課】 マタイによる福音書1章18～23節**

18 イエス・キリストの誕生の次第は次のようであった。母マリアはヨセフと婚約していたが、二人が一緒になる前に、聖霊によって身ごもっていることが明らかになった。19 夫ヨセフは正しい人であったので、マリアのことを表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心した。20 このように考えていると、主の天使が夢に現れて言った。「ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。21 マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。」22 このすべてのことが起こったのは、主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった。

23 「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。

その名はインマヌエルと呼ばれる。」

この名は、「神は我々と共におられる」という意味である。

**「聖書協会共同訳」(2018年版) 読み比べ****マタイによる福音書1章18～23節**

18 イエス・キリストの誕生の次第はこうであった。母マリアはヨセフと婚約していたが、一緒になる前に、聖霊によって身ごもっていることが分かった。19 夫ヨセフは正しい人であったので、マリアのことを表沙汰にするのを望まず、ひそかに離縁しようとして決心した。20 このように考えていると、主の天使が夢に現れて言った。「ダビデの子ヨセフ、恐れずマリアを妻に迎えなさい。マリアに宿った子は聖霊の働きによるのである。21 マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。」22 このすべてのことが起こったのは、主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった。

23 「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。

その名はインマヌエルと呼ばれる。」

これは、「神は私たちと共におられる」という意味である。

**黙想のためのノート****次主日聖書日課について**

・12月20日「待降節第4主日」の日課主題は「告知」。「降誕祭」は「降誕日(12月25日)」の前夜(12月24日)から祝い始めることが習慣となっているため、「待降節第4主日」は、必ず「降誕祭」を迎える週の初めの日(主日)となる。そのため、この週を「クリスマス週間」と呼ぶ場合もある。このことから、「待降節第4主日」は、「待降節」期間中でも「第3主日」までとは異なり、より「降誕祭」にシフトした視座に立った聖書日課が定められてきた。具体的には、「第3主日」までが「喜びの主日」も含めて「裁きと悔い改め」に主眼を置いて「救い主」到来の希望を告げることに視座を持っていたのに対して、「第4主日」は「救済実現のしるし」としての「男児誕生」を告知することに視座を置いている。

・「御子の降誕」は、初代教会においては主要な神学的主題ではなかった。初代教会にとって最も重要不可欠の神学主題は「十字架」と「復活」であり、「受難と復活の記念」は、年間暦の中に定められるより先に、七日ごとの「週の初めの日」に定められ記念されてきた。「御子の降誕」という神学主題は、「預言の実現」という聖書神学(聖書解釈)の問題として展開されたものであり、ユダヤ教主流派神学に対して「主イエス」を「救い主(キリスト=メシア)」として位置づけようとする初代教会(ユダヤ教ナザレ派)が主張の根拠となる聖書典拠を示す目的で構築した。その際、すでに「受難のキリスト」の神学の典拠として広く初代教会で共有されていた「主の僕=苦難の僕」を描く「イザヤ書」(42～53章)が、「御子の降誕」神学の典拠聖句の源泉として重視されたことは、想像に難くない。一方で、「旧約」正典には多くの男児誕生物語があり、それらの伝承が絡み合ったものとして「イエス降誕」伝承が形成されていったことも想像される。加えて、「ルカ福音書」などは、イエスの母マリアの証言があったことを示す描写を繰り返し、「イエス誕生物語」に実話伝承が含まれることを示唆しているが、これは初代教会間で広く共有されていたものとは言い難い。

**旧約日課(イザヤ7章より)**

・「イザヤ書」は、ユダヤ教正典中、「後の預言者」の第一巻として位置づけられ、「律法と預言者」全体の編集編纂に際して重要な役割を果たした文書であったことが推察される。本預言書は、紀元前8世紀に南王国宮廷に仕えた祭司・預言者イザヤの預言伝承集が元になった前半(～39章=「第一イザヤ」と、預言者イザヤの伝統を継承する預言者集団が紀元前6世紀、バビロン捕囚からの解放・帰還という時代背景の中で告げたと考えられる預言をまとめたと考えられる後半(40章～=「第二イザヤ」)に分けられる。「第一イザヤ」中の日課箇所は、預言者伝承を含んだ章句で、アハズ王との対話場面として伝えられている。

・南王国アハズ王(在位＝前 735-715 年頃)は、アッシリア王ティグラト・ピレセルが西方に進軍してきた時期に即位し、北王国(イスラエル＝エフライム)やアラム(ダマスカス＝シリア)と共にアッシリアに服従(属国化)した(王下 16 章)。北王国とアラムは同盟を結んでアッシリアの支配から脱そうとして南王国にも同調を求めたが、南王国はこれを拒んだため、北王国からの侵攻を受けたが、アッシリアの援軍を得て撃退した(シリア・エフライム戦争)。その結果、アラムはアッシリアに併合、北王国も事実上のアッシリア支配下に置かれることになった。北王国は、その後再びアッシリアの支配を脱そうとエジプトに接近したことで、アッシリアに完全に滅ぼされることになる。シリア・エフライム戦争に際して、北王国とアラムは南王国のダビデ王家から王権を奪取することを画策したとされる(イザヤ 7:5~6)。これに対して、預言者イザヤは、アハズ王が主に信頼して動揺することなく構えていれば必ず王家が存続し、一方で北王国とアラムはアッシリアによって滅ぼされると預言したのだが、アハズ王は、積極的にアッシリアに朝貢服属することで事態を打開しようとした。

・これらの歴史的背景を踏まえれば、預言者イザヤが「インヌエムエル」の名で誕生預言した者が、ダビデ王家の王位継承者のことであるのは明白である。アハズ王の子ヒゼキヤ(在位＝前 715~687 年頃)は、父王を継いで王となり、アッシリアの支配にもかかわらず一定の独立性を確保し、「列王記」では最も評価の高い王として描かれている(王下 18~20 章)。また、ほぼ同じ記事が「第一イザヤ書」の終わりに置かれている(36~39 章)。さらに、ヒゼキヤ王の曾孫にあたるヨシヤ王(在位＝前 640~609 年頃)も、「律法」に基づいた政治改革を断行した王として、「列王記」では特別に高い評価を与えられている。

・イザヤの「インヌエムエル預言」は、当初は、短い歴史射程で、次代ヒゼキヤがアハズを継いで王位を維持することを、古い「ナタン預言」などに基づいて告げたものが、歴史的検証に耐えて真正の「預言」として認められるようになったものと考えられる。しかし、その後、イザヤの伝統を継承する預言者集団が、一世紀後に王位を継承し「律法」的政治改革を推し進めたヨシヤ王の登場についても、この預言の実現を見いだした可能性はある。そのようにして「預言の実現」が真正性を増していくことによって、この預言は、より長い歴史的射程の中でも有効な預言として受けとめられていった可能性がある。そうであればこそ、二世紀後の預言者集団は、「第二イザヤ」預言集を「第一イザヤ」預言集と一つのものとして編集編纂したのだろう。この「インヌエムエル預言」には、「ダビデ王朝」神学の枠組みという限界の中にあることを無視できないが、そうであればこそ、主イエスについての神学的解釈がすんなり受け入れたということなのだろう。

### 使徒書日課(黙示録 11~12 章より)

・「ヨハネの黙示録」は、「僕ヨハネ」が幽閉の身で孤独に守っていた主の日の礼拝に際して見た幻を、彼の関係する「アジアの七つの教会」に書簡形式で伝えるという形態の文書としてまとめられている。標題の「黙示(アポカリュプシス)」は、新約中では使徒書で頻繁に用いられ、通常は「啓示」と訳される語。文学様式として、ペルシャ宗教に由来する天上界の神的営為が幻によって示されるという表現方法を「黙示文学」と呼ぶが、「啓示」がすべて黙示文学的であるわけではない。本書は、「黙示文学」の様式で描かれているため「黙示録」と訳されている。ただし、本書の場合は、ほとんどの描写表現を「旧約」中から借用している。日課箇所も、おもな描写は「ダニエル書」12 章などからの援用である。

・この男児誕生の幻は、主イエスを指し示していると推認されるが、詳細な描写の意味の解釈は困難である。生まれてくる男の子を食べてしまおうとする「竜」は何者を意味しているのか、男の子を生んだ「女」が「荒れ野」に逃れて「千二百六十日」養われるとは何のことなのか。女が「竜」≡「蛇」と敵対関係にあるという設定は、アダムとエバの墮罪物語の中にある(創世記 3 章)。また、男の子を生んだ女が荒れ野に逃れるという情景は、アブラハム物語の中で女奴隷ハガルがイシュマエルを生んだ場面にある(創世記 16 章)。

### 福音書日課(マタイ 1 章より)

・日課箇所は、「マタイ福音書」の伝える主イエス降誕伝承で、2 章まで続く。この伝承物語(1~2 章)は、「主イエス」個人の神学的位置づけを旧約預言を典拠として示すことを目的としており、どこまでが実話伝承に基づくものなのかは不明である。日課箇所を含む 1 章では、もっぱら、主イエスが「ユダ族ダビデ王家」の家系の中に生まれたこと、それゆえに「イザヤ書」の「インヌエムエル預言」が適用されることが主張されている。日課箇所の前提となる 1 章前半の系図で問題になるのは、バビロン捕囚以降の 14 世代の真正性であるが、当時のユダヤ人のほとんどが「ユダ族」か「ベニヤミン族」または「レビ族」の末裔であり、「ユダヤ人」という民族的枠組みを基礎とした宗教共同体「ユダヤ教」を形成していた社会にあって、ユダ族ユダヤ人の多くは、系図を遡れば王家との関係を見出すことは可能だったと考えられる。つまり、ここで「主イエス」が「ダビデの家系」であることを主張するというのは、彼が「ユダ族の出身」であるということとほぼ同義である。

・22~23 節で「イザヤ書」の「インヌエムエル預言」が主イエスに適用されているが、これは前述のとおり、「ダビデ王家」が神の救済計画の中で永遠に用いられるという「ナタン預言」から始まる預言の拡大適用である。

・ここで「おとめ」は「未婚女性」の意の「パルテノス」で、「ギリシア語旧約聖書」に基づくが、「ヘブライ語聖書」の原語は「アルマー」で「結婚適齢期の若い女」の意。

来週の誕生日 (12月20日～26日)

主日礼拝の讃美歌から

- ・21-242 番「主を待ち望むアドヴェント」は、20世紀オーストリアの女性教師フェルシュルの作詞。さまざまな曲で歌われてきたが、ドイツのカトリック音楽教師ロールの旋律でよく知られるようになった。
- ・21-261 番「もろびとこぞりて」(= I 112)は、18世紀英国で代々非国教会系牧師であったフィリップ・ドットリッジが作詞しスコットランドの讃美歌集(1745年)で発表された歌詞に、18世紀英国で宮廷音楽家として活躍したG.F.ヘンデル作曲のオラトリオ「ヘンデル」の旋律から着想されて編曲されてきた曲「アンティオケ」が組み合わせられたもの。「アンティオケ」にはウォッツ作詞「Joy to the World」も組み合わせられ、1903年版『讃美歌』では同じ曲に二つの歌詞が組み合わせられている。現在、英語圏では、「アンティオケ」に組み合わせられるのはウォッツの歌詞、ドットリッジの歌詞には別曲を組み合わせるのが一般的。
- ・21-76 番「今こそ歌いて」は、中世最大の神学者トマス・アキナスによる聖餐讃美の詞。曲はフランス教会旋律による。
- ・21-260 番「いざ歌え、いざ祝え」(= I 108)は、18-19世紀ドイツで孤児院を経営していたヨハネス・ファルクがルター劇のために作詞した1節、彼の同僚ハインリッヒ・ホルツシュアーが2節、3節を作詞して加えたものに、ファルクの友人であったヨハン・ヘルダーがイタリアで採譜したとされる曲「シチリアの船乗り」を組み合わせたもので、ドイツのクリスマス讃美歌として広く歌われるようになった。同じ曲が英語圏では別の歌詞(I 64「みかみよ、めぐみを」と)組み合わせられて歌われている。また、「勝利をのぞみ」(21-471)は、この曲から着想を得たと考えられている。

21-242 番「主を待ち望むアドヴェント」

*Wir sagen euch an den lieben Advent*

1. Wir sagen euch an den lieben Advent. / Sehet die erste Kerze brennt! / Wir sagen euch an eine heilige Zeit, / Machet dem Herrn den Weg bereit!  
|: Freut euch ihr Christen, / Freuet euch sehr! / Schon ist nahe der Herr.:|
2. Wir sagen euch an den lieben Advent. / Sehet die zweite Kerze brennt! / So nehmet euch eins um das andere an, / Wie euch der Herr an uns getan.  
|: Freut euch ihr Christen, / Freuet euch sehr! / Schon ist nahe der Herr.:|
3. Wir sagen euch an den lieben Advent. / Sehet die dritte Kerze brennt! / Nun trag eurer Güte hellen Schein / Weit in die dunkle Welt hinein.  
|: Freut euch ihr Christen, / Freuet euch sehr! / Schon ist nahe der Herr.:|

4. Wir sagen euch an den lieben Advent. / Sehet die vierte Kerze brennt. / Gott selber wird kommen. Er zögert nicht. / Auf, auf ihr Herzen und werdet licht!  
|: Freut euch ihr Christen, / Freuet euch sehr! / Schon ist nahe der Herr.:|

21-261 番「もろびとこぞりて」

*Hark, the glad sound! the Savior comes*

1. Hark the glad sound! The Savior comes, / the Savior promised long; / let ev'ry heart prepare a throne / and ev'ry voice a song.
2. He comes the pris'ners to release, / in Satan's bondage held. / The gates of brass before Him burst, / the iron fetters yield.
3. He comes the broken heart to bind, / the bleeding soul to cure, / and with the treasures of his grace / to enrich the humble poor.
4. Our glad hosannas, Prince of Peace, / your welcome shall proclaim, / and heav'n's eternal arches ring / with your beloved name.

([Evangelical Lutheran Worship #239](#))

21-76「今こそ歌いて」

*Pange Lingua, Gloriosi Corporis Mysterium*

1. Pange, lingua, gloriósi / Córporis mystérium, / Sanguinisque pretiósí, / Quem in mundi prétium / Fructus ventris generósi / Rex effúdit géntium.
2. Nobis datus, nobis natus / Ex intácta Vírgine, / Et in mundo conversátus, / Sparso verbi sémine, / Sui moras incolátus / Miro clausit órđine.
3. In supréma nocte coenæ / Recúbens cum frátribus / Observáta lege plene / Cibis in legálibus, / Cibum turbæ duodénæ / Se dat suis mánibus.
4. Verbum caro, panem verum / Verbo carnem éfficit: / Fitque sanguis Christi merum, / Et si sensus déficit, / Ad firmándum cor sincérum / Sola fides súfficit.
5. TANTUM ERGO SACRAMÉNTUM / Venerémur cernui: / Et antiqum documéntum / Novo cedat ritui: / Præstet fides suppleméntum / Sénsuum deféctui.
6. Genitóri, Genitóque / Laus et jubilátio, / Salus, honor, virtus quoque / Sit et benedíctio: / Procedénti ab utróque / Compar sit laudátio. / Amen. Alleluja.

21-260 番「いざ歌え、いざ祝え」

*O du fröhliche*

1. O du fröhliche, O du selige, / gnadenbringende Weihnachtszeit! / Welt ging verloren, Christ ward geboren: / Freue, freue dich, O Christenheit!
2. O du fröhliche, O du selige, / gnadenbringende Weihnachtszeit! / Christ ist erschienen, uns zu versüßnen: / Freue, freue dich, O Christenheit!
3. O du fröhliche, O du selige, / gnadenbringende Weihnachtszeit! / Himmlische Heere jauchzen dir Ehre: / Freue, freue dich, O Christenheit!